海外技術者リポート

イラク桟橋工事に従事して

鳥　居　　剛*

私は，昭和47年土木学科を卒業し，東亜建設工業（株）に入社致しました．国内で，設計2年，現場6年を経て，昭和55年6月，桟橋建設の為，18ケ月の予定で，石油国イラクに単身赴任致しました．我々日本人にとって，イラクという中近東の中でもとかくベールに包まれがちな国について，多少なりとも体験を通じて見聞きした事実や印象を皆様方に紹介できれば幸いと存じております．

1．気候・風土について

私達が赴任した場所は，イラク南東部，イランに最も近い，イラク第2の都市バスラです．

首都バグダッドの華やかさに比べ，近代都市とはほど遠い，貧しい町という印象が強烈に残っております．赴任後3ケ月にして，イラン・イラク戦争にまきこまれ，工事の合い間をぬって，旅に出かけることもできず，イラク北部地方については，この中で述べることが出来ないのが残念な次第です．

イラク南部は，広大な土漠（砂漠の砂に比べ土粒子が小さく，泥化していく状態にある．）に占められ，乾燥しきった土地には，緑らしきものはほとんど見られず，地平線がくっきりと入ってきます．気候は，乾期と雨期に分かれ，乾期は4月から11月頃まで続き，その間ほとんど1日も雨が降らず，6月から9月に到っては，日中50℃を越える日々の連続で，洗濯物などは，30分もすれば完全に乾き，野犬もトカゲも小鳥も全て日中は活動を停止してしまいます．そのうえ，3日に1度くらいの割合で，風速 20 M/S を越す砂嵐がいやおうなしにおそってくるのです．車は徐行，車窓は全てしめられ，この招かれざる客に備えなければなりません．

雲一つない青空もこの日ばかりは，どんよりと雲ってしまうのです．朝夕は，40℃以下にはなりますが，我々日本人にとっては，クーラーは，生活の必需品となります．ただ，この酷暑の中において，湿気がほとんどないのがせめてもの救いでしょうか．

一方，雨期になると，気候は一変して，日本の秋を想わせるすばらしい日々が続きます．日中は20℃前後，朝夕は10℃以下にもなり，週に1～2日程度の雨は，万物を甦みがえらせてくれるのです．

2．イラク人の生活について

国民の大半は，アラブ人種からなり，白色系，黄色系，黒色系と，過去の数々の侵略と征服の歴史がよくうかがわれます．宗教は，イスラム教が大半を占めていますが，最近，自由を求める若者達の間にキリスト教への転信者が増えていることは事実です．町をいくチャドル姿の女性の中に，カラフルな洋服姿が目立つことからも，その一端がうかがわれます．熱心なイスラム教徒は，毎日の祈りをかかすことなく，又，ラマダン（断食）の時期には，徹底してその厳しい業を行っています．

イラクは，社会主義国家ではありますが，貧富の差が激しく，住居に例をみるだけでも，土を固めてつくった家屋（電気設備，下水設備等もない．）に住む者と，鉄筋コンクリート造りの広々とした邸宅に住む者との格差からも如実にうかがわれます．生活必需品は，ほとんど外国からの輸入に頼り，中国製陶器，インド製衣類，日本製電化製品等が店先にところ狭しと並んでいます．車もほとんど日本製に占められている現状です．

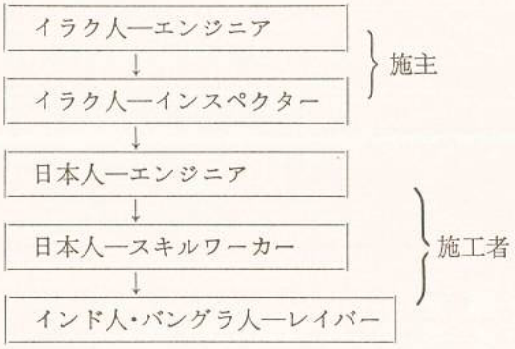
*鳥居　剛（Tsuyoshi TORII），東亜建設工業株式会社，海外事業部，工事科，工事主任，学士，土木工学

彼等の主食は，ホブス（直径 30 cm くらいの薄い両面を焼いたパン）で，羊肉，魚肉，タマネギ，トマトを包み込んだり，フライライス（バターいためしたライス）を副食にしたものが大半です．食通の日本人には，少しお粗末にみえますが，一度味わえばその珍味に，大半のものがやみつきになってしまうようです．イラクは，イスラム教社会では珍しく，禁酒国でなく，レストラン等で，ビールは手軽るに入手できます．

イラクは，現在戦時下にあり，町のいたるところに軍車輌，兵隊が見うけられるのですが，時折り鳴りひびく空襲警報に，誰一人避難しようとするものが居ないのには，驚ろかされます．

3．工事に参加して

組織



上述した組織にて工事を進めました．

エンジニア（イラク人）は，イギリスの教育を受け，B．S．規格を熟知し，堪能な英語で，徹底して，契約書，仕様書に基づいた工事管理を行います．日本人発想的な，現場優先の考え方などは一切許されません．変更は，即，減額対象になり，増額対象は，全く認められないのです．これは，アラブ商法として片付けられるものでは決してありません．発生の予想される問題について，事細かに，理論，理念に基づいて，いかに契約書を作るかに依るからです．言語も違い，考え方も違う者同志が最終的には，契約書，仕様書に基づいて判断するのは，ごく当然といえるかもしれません．日本社会では，義理や人情で片付く事も，ここでは，そういうわけにはいきません．約束事も全てレターで処理され，“言った，言わない”のトラブル等は一切発生しません．

一方，工事現場は，全て，インスペクターの管理に任されます．彼等は，豊富な経験をバックボーンに，常時現場に待機し，各工程を全てチエックし，承認業務を行います．我々と接する時間が最も長く，互いに信頼関係で結ばれなければなりません．工事を迅速にすすめる上で，彼等の存在が最も大きくなってくるのです．

彼等は，大半がアラビア語しか話せないのですが，主張している事を的確にとらえ，誠意をもって接することが第一です．この点に関しては，日本もイラクも全く変わりがないようです．我々が自分の家を建てる時，施工者に対して誰もがいだく気持ちを彼らも同じようにもって常に対処しているということです．

次にレイバーについて，彼等のプロフェッショナルな一面を紹介します．

今回の我々の現場には，約300名程のインド人，バングラデイッシュ人のレイバーがいましたが，共通して言えることは，金もうけの為に生活の全てを仕事に費やしていたということです．真夜中，午前1時から2時迄の1時間の残業にも我も我もと仕事を求めてくるもの，月2回の休日にも，朝6時になると，我々の部屋の戸をたたいて，仕事を得る為に，自己アピールにやってくるもの，日本では考えられない光景です．それに加え，我々機械に頼りすぎる日本人と比べ，労力を惜しまない姿勢です．1屯もある鋼製型枠を，クレーンを待たずに，コロを使って移動したり，50 m もの溝掘りに，掘削機械の到着をまたず，人力で掘削を始めたりするのです．これには，我々脱帽せずにはおられませんでした．

4．イラクを去るにあたり

イラクは，国家をあげて，近代化をおしすすめて居り，下水，各種プラント，病院，学校，住宅，港湾設備等の建設が急ピッチで行なわれています．これに参画している国々も，日本，韓国，イギリス，フランス，ドイツ，ポーランド，インド，ソ連と色々です．

軍事に大半の労働力をとられ，いく分かは，自国産業育成の兆しは見えはじめてきたもの

の．まだまだイラクは外国の援助をあおがねばなりません．巨大な石油資本をバックに，今後も設備投資が続いていくでしょう．

土木分野を見る限りにおいても，国内産業の斜陽化と共にますます，こうした中近東の国に活路を求めていくことが十分予想されますが，国際的競争に決して負けない技術力を身につける事が望まれます．

次期オリンピック開催地，韓国の国際舞台での活躍は，実にすばらしいものがあり，技術面においても，日本に劣らぬ力をつけてきています．各個人を比較しても，語学力は，はるか日本人にまさっています．

韓国だけによらず，他国との国際競争力に十分たちうちする為にも，我々個々人にとって，技術力の向上は言うに及ばず，英語力，強靱な精神力を養う時期にきているのではないでしょうか．

編集委員

委員長

長谷川 嘉雄 教授（機械工学科）

委員

工学部

竹本 喜一 教授（石油化学科）
塩川 二朗 教授（応用化学科）
岡田 弘輔 教授（醗酵工学科）
近江 宗一 教授（冶金工学科）
藤井 克彦 教授（電気工学科）
難波 義治 助教授（精密工学科）
藤田 茂 教授（応用物理学科）
滑川 敏彦 教授（通信工学科）
丸尾 大 教授（溶接工学科）
椹木 亨 教授（土木工学科）
足立 孝 教授（建築工学科）
塙 輝雄 教授（電子工学科）
住田 健二 教授（原子力工学科）
橋本 奨 教授（環境工学科）
鈴木 敏夫 助教授（造船工学科）

理学部

小高 忠男 教授（高分子学科）

基礎工学部

大竹 伝雄 教授（化学工学科）

産業科学研究所

松尾 幸人 教授（電子科学研究部）

蛋白質研究所

京極 好正 教授（蛋白質物性部門）

溶接工学研究所

井上 勝敏 教授（融接機構部門）

レーザー核融合研究センター

山中 龍彦 教授（レーザー診断学部門）

薬学部

田村 恭光 教授（製薬化学科）

季刊誌 生産と技術 第34巻 秋号

編集者
発行者 池田 悦治

昭和57年10月20日 印刷
昭和57年10月25日 発行

発行所 社団法人 生産技術振興協会
〒565 大阪府吹田市藤白台5-125-18
大阪大学工業会館
電話 06—833—1385

印刷 秀栄社
TEL(06)353—5268

無断転載お断りします